

PHP総研からの提案 ふるさとの歴史・文化を地域づくりに活かすために

地方創生が課題となっている今、その地域ならではの「なら」と「いわれる」らしさのある地域づくりが求められており、歴史・文化遺産や景観・地場産業といった地域資源を活用した地域づくりへの努力が各地で活発に行なわれています。

しかし、いかに素晴らしい歴史・文化資源や景観があり、それらが整備されたとしても、そこに住む人々のところ、生き方や考え方、行動やふるまいが伴わなければ、本当の意味での地域づくりにはならないのではないのでしょうか。

まちは、そこに住む（あるいはそこをふるさととする）人々が、そのまちに誇りと自信をもち、そのまちで生きることの幸せと喜びを自から感じ、人にも語れてこそ、はじめて生きがいや住みがい、訪れがいのある魅力的なまちになります。「まちづくり」は、「人づくり、心そだて」だと言われるゆえんです。逆に言えば、「人づくり、心そだて」なくして「まちづくり」はないともいえます。

昭和21年11月3日、PHP運動を始めるにあたって、松下幸之助は、

「われわれが今日この程度の文化生活をしていられるのは、われわれの先人が真剣に研究してもろもろの真理の探究に尽くされたおかげである」

「われわれは、この先人に感謝の念をささげるとともに、先人たちの努力に感謝し、その努力を受け継いで自らの力を尽し、さらにこれを後代に伝えねばならない」

と、述べました。

まちづくりも同じではないのでしょうか。

どこの地域にも、さまざまな困難を乗り越えて、まちのため、そこに住む人々のため、世のため、人のために献身した「偉人」「先人」といわれる立派な人物が必ずいます。今のまちがあり、そのまちに私たちが住めるのは、そのような先人たちの血と汗の賜物に他なりません。ですから、私たちは、その先人たちに感謝するとともに、先人たちの努力と思いを引き継いで、まちづくりを行ない、子、孫の時代に素晴らしいまちを残す努力をしなければなりません。

別の角度でみれば、それら地域の先人の経験や体験は、現代に生きる私たちにとってもっとも身近でわかりやすい生き方・考え方の手本、その地域ならではの「こころの遺産」に他ならず、地域の歴史や文化、特性を考える優れた素材であるとも言えます。それら地域に埋もれたふるさとの先人を再発見し、共有の財産にすることは、地域づくりをする際の参考になるだけでなく、地域に生きる人々に人生指針と勇気と自信をあたえ、「人づくり」や「心そだて」に大きく寄与するとともに、「なら」いわれる「らしさ」のある「まちづくり」の実現を可能にします。

さらに、先人たちが遺してくれた「こころの遺産」を自分たちの地域だけのものにするのではなく、点から線へ、線から面へとつなげ、共に学び、共に歩み、共に情報を発信することで、情報の出力と入力のフィードバックが可能となり、より普遍性があり、広がりのある「こころの遺産」となります。その結果、地域が豊かで元気になり、日本が豊かで元気になり、世界の人々にもあこがれと希望を与えることになるのではないのでしょうか？

そういった視点から、私たちは、ふるさとの先人とその先人たちが伝えてくれた「こころの遺産」ととくに焦点をあてつつ、ふるさとの歴史や文化を活かしたまちづくり、人づくり、心そだてを、ともに考え実践していくことを提案します。

【1】『恕』の精神—美しい日本人のこころ』を取り戻す地域づくりをしましょう

「恕」とは、儒教の教えにある「相手の気持ちになって考えるやさしさとおもいやり、温もり」のことです。こうした心の柱を持っていたからこそ、先人たちは、世の中が大きく変わろうとも幾多の困難を乗り越え、世のため、人のために献身しました。しかも、日本では、その恕の精神が、長い歴史を通じて、社会の根底、人びとの生き方・考え方の根底に流れ続けてきました。その意味では、日本の歴史は、「恕の精神」に彩られながら歩んできたと言っても過言ではありません。世界に誇る「日本人の美しい心」と言ってもいいでしょう。

この恕の精神に裏打ちされながら時々を歩んできた「人のこころ」という遺産に焦点を当て、これを現代に生きる私たちの生き方、考え方を手本とし、さらには、「らしさ」のある地域づくりの素材としましょう。

【2】ふるさとの先人のレガシー効果の活用をしましょう

レガシーとは、文化や環境に関わる社会的遺産のことであり、その効果とは、短期的な経済効果だけでなく、「長期にわたってまちづくりに与える、特にポジティブな効果」のことです。その効果は、文化財や景観などの有形・無形のレガシーのみならず、地域に対する住民の愛着、誇り、満足感、地域の一員としての当事者意識などの精神的なレガシーがあります。そして、その精神的なレガシーは、先人たちの知恵と経験として「こころの遺産」として引き継がれてきたものがたくさんあります。

地域創生、地域づくりを考える際、ともすれば、文化財や史跡・名勝・景観といった「目に見える地域遺産」に目がむきがちですが、それらをつくったのも「ふるさと先人たち」の目に見えない知恵と経験、血と汗です。それらを「こころの遺産」と位置づけることにより、ふるさとの先人に目を向け、地域づくりに活かすことで、精神的なレガシーをより喚起するとともに、有形・無形のレガシーをより高め、元気で生き生きとしたまち、「なら」といわれる「らしさ」のあるまちづくりを実現していきましょう。

【3】「点から線へ、線から面へ」—連携とネットワーク化による地域づくりをしましょう

先人を顕彰する団体は全国に沢山あります。また、観光や教育などで先人を地域づくり活用する自治体も沢山ありますが、それぞれ独自に活動を行なっているのはもったいないことです。点としての活動を線としてつなげ、さらに面的な広がりを持たせる連携とネットワークを構築することで、情報の出力と入力のフィードバックによる相乗効果が生まれ、よりよい地域づくり、より広がりのある地域づくりが可能になります。また、広がりを持つことで、それぞれの活動の「見える化」が可能となり、一般市民の興味と関心を呼び起こすこともできます。

【4】共に学び、共に探り、共に世界に情報を発信できる舞台（プラットフォーム）づくりをしましょう

先人の価値を情報発信するとは言っても、さまざまな制約条件下で、個々の自治体単独でできること、訴求力には限界が付きものです。そこで、自治体が先人を介して連携し、その学びの価値を共有したり、その成果をそれぞれのまちづくりに還元する情報の受発信の舞台（プラットフォーム）を、自治体が連携して設けることは、個々の弱点を補えます。嚶鳴協議会で見られるように、共に切磋琢磨する活動拠点としての「広場設置」、情報の受発信の舞台としての「ポータルサイト」の設置は有効でしょう。またそのことによって、共通の普遍的な価値を見出し、全国や世界に訴えかけることも可能となるでしょう。

【5】「モノの壁」「しくみ（組織）の壁」「こころの壁」を取り払う努力をしましょう

互いに手を取り合って、ふるさとの歴史・文化、先人を地域づくりに活かそうとするとき、どうしても、「モノの壁」「しくみ（組織）の壁」「こころの壁」といったような障壁を乗り越えなければなりません。そこで、衆知を集めてこれらの壁を取り払い、乗り越える努力をする必要があります。